

普及指導員調査研究報告書

課題名：減化学農薬栽培の実現

農林総合技術センター農業担い手支援部 就農・技術支援室

担当者氏名：鍛冶原寛、福谷深一郎

＜活動事例の要旨＞

減化学農薬栽培の拡大が可能な品目を検討するため、各品目の病虫害防除暦を調査した。今年度は、水稻、イチゴ、トマト、はなっこりー、タマネギ、ブドウの各栽培暦に記載されている農薬を調査し、新たな農薬の提案や、病虫害薬剤感受性が低下している薬剤の暦からの削除等の指導を行った。

1 普及活動の課題・目標

食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立を実現することを目的に「みどりの食料システム戦略」が策定され、2050年目標として化学農薬使用量50%低減（リスク換算）が挙げられている。一方で、地球温暖化にともない病虫害がまん延し、主に薬剤防除により対応する中、薬剤抵抗性を獲得した病虫害が発生する事態も生じており、生産環境の改善に向けた環境負荷軽減が課題となっている。そこで、減化学農薬栽培の実現に向け、防除所と協力して薬剤抵抗性の有無を調査するとともに、各作目の防除暦を確認し、より防除効果の高い薬剤を選定・普及を行う。また、併せて従来実施している病虫害・生育障害診断により、的確な診断の実施および防除技術の指導を実施することにより、減農薬栽培の実現を目指す。

2 普及活動の内容

(1) 各作目の防除暦の確認

水稻、イチゴ、トマト、はなっこりー、タマネギ、ブドウの防除暦の確認を行った。

(2) 薬剤抵抗性検定

病虫害防除所が実施するトマト葉かび病菌、イチゴ炭疽病菌に対する薬剤抵抗性検定で供試するサンプル（発病株）提供の協力と、各農林水産事務所へ検定結果報告を実施し、防除暦作成のアドバイスを行った。

(3) 病虫害・生育障害診断

正確な病虫害診断は、その後の有効な防除対策を講じることを可能とする。各農林水産事務所やJAで診断できなかった案件を対象に、資源循環研究室と協力して同定作業を実施し、その結果をもとに就農・技術支援室がその防除対策を提案した。

3 普及活動の成果

・防除暦の確認；

(水稻) 稲こうじ用の殺菌剤の提案（出穂20日前）

(はなっこりー) 多作用点接触殺菌効果を有する銅剤等の掲載を提案

(タマネギ) 越年罹病株対策として2月に治療剤散布を提案

(ブドウ) 販売中止となる殺菌剤の代替剤の提案

- ・薬剤抵抗性検定

- (トマト灰色かび病)

- 県内4ほ場(98菌株)で冬春トマトの灰色かび病薬剤感受性検定した結果、SDHI剤(7)及びQoI剤(11)の耐性菌が多く認められた。

- (トマト葉かび病、すすかび病)

- 夏秋トマト産地18ほ場から葉かび病菌33菌株、すすかび病菌24菌株を採取し、SDHI剤の感受性検定を実施したところ、すすかび病菌のすべてがSDHI剤に対して耐性菌であった。葉かび病菌も耐性菌が多く認められた。

- (イチゴ炭疽病)

- 県内イチゴ産地7ほ場から炭疽病菌60菌株を採取し、QoI剤の感受性検定を実施したところ、すべての炭疽病菌が耐性菌であった。

以上の結果は、各農林事務所担当者へ提供した。

- ・病害虫・生育障害診断

- 本年度45件の診断依頼があり、診断と対策について指導を行った。

4 今後の普及活動に向けて

- ・防除暦の確認を実施したものについては、令和5年度以降も同防除暦を参考にするとともに、総合防除を実践し、減農薬栽培に向けた取組みを行う。
- ・薬剤抵抗性が発達した薬剤については、直ちに使用を中止し、代替剤や他の防除方法の提案を行う。